

# 19世紀イギリス貴族屋敷の家事使用人

## —『ドリアン・グレイの肖像』のヴァレット考察—

The Domestic Servants of Aristocratic House  
in Nineteenth-Century England:  
A Study of Valet in *The Picture of Dorian Gray*

桐 山 恵 子

Keiko KIRIYAMA

19世紀イギリス社会で、農業従事者に次いで第二の就業人口を占めるまでに拡大した家事使用人<sup>(1)</sup>。田舎から大都市へと移動した人々は必ずしも工場に向かったわけではなく、工場労働者を上回る多くの人々が、屋敷の主人に仕える住みこみの家事使用人として働いていた<sup>(2)</sup>。ヴィクトリア朝使用人の特徴として、労働力としての需要もさることながら、屋敷の社会的ステータスのシンボルとしての役割も担ったことが指摘できる。それゆえ広大な屋敷の維持のため大勢の使用人を必要とした上流階級のみならず、必ずしも労働力としての使用人は必要としなかった中流階級ですら、労働者階級との差異を強調するために最低でも一人の使用人を雇おうと躍起になった。実際、一人の使用人を雇う経済的余裕しかない屋敷の主人は、道行く人々に家事使用人の存在をアピールするため、意図的に玄関口の掃除をさせたほどである<sup>(3)</sup>。

社会的存在意義が高まった家事使用人が、同時代を作品背景にもつヴィクトリア朝小説に頻繁に登場し、ときに重要な役割を果たすのは当然だろう。19世紀イギリス社会の人間模様を写しとろうとすれば、そこに使用人の活躍を描かずにすまず方が難しかったかもしれない<sup>(4)</sup>。ヴィクトリア朝上流社交界を舞台に多くの作品を描いたオスカー・ワイルド（1854－1900）も、小説、短編、喜劇に様々な家事使用人を登場させている。しかし作者本人が唯美主義を

---

(1) 1851年にイギリスの家事使用人はおよそ100万人存在し、就労人口の約13パーセントを占めた。1891年には200万人を超え、約16パーセントに拡大した。Damon, p. 23, Hayward, p. 1, May, p. 4, Mitchell, p. 49, Pool, p. 220.

(2) 家事使用人の多くは田舎出身だったが、19世紀後半になると都会生まれの使用人も増えていった。Thompson, p. 247.

(3) Hughes, p. 37.

(4) James Eli Adams, pp. 66-67.

信奉し、ダンディーな紳士ぶりで社交界をにぎわせたためもあり、これまでのワイルド批評で分析対象となる人物は、とかく上流階級の人々に偏っていたようだ。

そこで今回は、肖像画に老いと罪の烙印を負わせる代わりに、自身の肉体は永遠の美を保つ青年貴族の栄華と破滅を描いた小説『ドリアン・グレイの肖像』（1891）を中心に、ワイルド作品に描かれた屋敷の主人に仕える家事使用人に注目したい。労働力としてだけでなく、社会的ステイタスとしての意味あいも大きかった使用人に注目すれば、これまでとは違う新しい視点から、産業革命を経て、すでに繁栄を極めた後のヴィクトリア朝社会の一端を浮かび上がらせることができるだろう。貴族ドリアンと屋敷の家事使用人との関係を考察し、19世紀イギリス貴族が抱かずにいられなかった苦悩を探り出したい。

## I

19世紀イギリス紳士の日常生活を端的に表したものとして、ワイルドの喜劇『理想の夫』からメイベル嬢の台詞を見てみよう。婚約者ゴーリング卿の怠惰な暮らしぶりを非難された彼女は、彼を次のように擁護する。

「毎朝10時にはハイド・パークのロットン通りで乗馬をし、週に3回はオペラ座に行き、少なくとも日に5回は洋服を着がえ、社交シーズンには毎晩ディナーに出かけるのよ。こんな生活が、怠惰といえるかしら？」<sup>(5)</sup>

時間や回数の数字に縛られたゴーリング卿の日常は、上流社会のしきたりに従った規則正しいものであり、決して怠惰ではない。そのうえダンディーな紳士を自任する彼は、社交の場に出るたびに、たとえばボタンホールに挿す花にまで気を配り、日常生活のささいな点に至るまで人並みならぬこだわりをみせる。

『ドリアン・グレイの肖像』の美貌の青年ドリアンも、唯美主義を実践するダンディーな紳士として名を馳せ、ゴーリング卿と同様の日常を送っている。ドリアンの暮らしぶりは、以下のように要約可能だ。

我々はドリアンがワインを飲んだり食事をしたり、劇場や美術館に出かけたり、阿片窟に行ったり、田舎の狩猟の団に加わったりするのを知っている……しかし彼が働いたり、労働について話をするのは見たことがない。<sup>(6)</sup>

社交界でのスケジュールを次々にこなすドリアンは、無為に時を過ごしているわけではな

---

(5) Wilde, *An Ideal Husband*, p. 516.

(6) Guy, p. 164.

い。しかし彼の一連の活動は労働とは無縁であり、すべて余暇活動にすぎない。「余暇こそが義務である上流社会」の人々は、「働いてはならないというプレッシャー」<sup>(7)</sup>の下で、晩餐会や狩猟などの活動にひたすら精を出すのだ。

しかし余暇活動にいそしむのみで、自身は一切働かないですますためには、当然ながら代わりに働く人間が必要となる。そしてその役割を果たしたのが、「ロンドンで最大の雇用口」だった「屋敷で働く家事使用人」<sup>(8)</sup>なのだ。比較的裕福な屋敷の使用人の内訳は以下のようなものだ。

女性スタッフには、ハウスキーパー、レディーズメイド、ナースメイド、二人のハウスメイド、ランドリーメイド、キッチンメイド、台所の下働きがいた。男性使用人としては、執事、ヴァレット、ハウスチュアート、御者、三人の馬丁、二人のフットマン、庭師、もしかすると雑役夫もいたかもしれない。<sup>(9)</sup>

上流貴族ケルソー卿の家系に生まれたドリアンは、上記の例にもれず多数の家事使用人を雇用している。彼はグローヴナー広場近くのロンドン屋敷以外にも、田舎の別邸セルビー・ロイヤルなどいくつかの地所を所有し、各々に専属の使用人がいたようだ。たとえば狩猟や大規模な晩餐会に使用される広大な領地を有したセルビー・ロイヤル邸では、田舎の屋敷に特有の庭師や猟番なども雇用されていた。数人の使用人しかない小さな屋敷とは違い、ドリアン<sup>(9)</sup>の屋敷のように様々な職種の使用人がいる場合は、彼らの間にもれっきとした階級差があった。通常は、一番位の高い男性の執事が、女性使用人のトップであるハウスキーパーと相談しつつ、屋敷の運営全般に気を配り、以下に続く下級使用人を統括していた。

屋敷の主人であるドリアンと家事使用人との関係を考察する上でもっとも興味深いのは、男性使用人の中で執事に次いで高い地位を占めたヴァレットだ。

ヴァレットとは、主人の私的使用人であり、屋敷の家事に多くの特権を有している。第一の役割として、あらゆる機会に備えて主人の衣服を適切で清潔な状態に整え、身の回りの世話を行わなければならない。（ひょっとすると、剃髪用の石鹸や靴みがき用の秘密の調剤を使用するかもしれない）。靴紐にアイロンをかけ、着がえを洗濯しなければならない。ヴァレットはその重要性ゆえに、主人の旅行

---

(7) Nunokawa, p. 105, p. 98.

(8) Eckardt, p. 116

(9) Eckardt, p. 116. 各職種の詳細な仕事内容については、ヴィクトリア朝に流布した使用人へのアドバイス本 Samuel and Sarah Adams, *The Complete Servant* (Sussex: Southover, 2004) が有益。執筆者のアダムズ夫妻は自身が使用人経験者だった。

にも同伴し、鉄道の時刻表を読み、貴重品や現金の管理も行う。ヴァレットは、<sup>(10)</sup>多くの公にはできない主人の秘密を知ることになる。

主人の身の回りの世話を一手に引きうけるヴァレットは、主人のおさがりの洋服をゆずりうけ、それを制服として着用するほど、主人との関係がもっとも親密な使用人だった。

さらにヴァレットは、家事使用人の中でも特に「ステイタス・シンボル」<sup>(11)</sup>としての大きな役割を担っていた。当時は女性使用人に比べて男性使用人には高い税金がかかったため、男性使用人がいるだけでその屋敷の格は上がるとみなされた。<sup>(12)</sup>ましてヴァレットの存在は、屋敷の主人の金銭的優位を一層強調するものだった。なぜなら上記のようなヴァレットの仕事内容は、一般的には執事やフットマンが行うものであり、それらの職種に加え、さらにヴァレットを雇用する主人は、相当な財産家であることを意味したからだ。<sup>(13)</sup>中流階級の人々が、大半がかつては自身もそこに属した労働者階級との差異を強調するために、どうにか一人の女性使用人を雇おうと躍起になったように、上流貴族は自分たちの際立った権威を確信づけるため、男性使用人、中でもヴァレットを雇用しようとしたのである。しかし労働力としては他の使用人で十分足りるはずの屋敷に、あえてヴァレットを雇い、その存在で社会的ステイタスを誇示した貴族を思うとき、由緒あるケルソー卿の家に生まれたドリアンですら、ことさらに裕福な高い家柄であることを強調しなければ矜持が保てないほど、19世紀イギリス上流貴族の地位は次第に危ういものになりつつあったのかもしれない。

## II

下級使用人の多くが主人とは顔をあわせることもない中、上級使用人のヴァレットは、主人の私生活に密着した特権的な役目をもっていた。ドリアンのヴァレットが、朝の身支度をする主人に仕えるさまを見てみよう。

ドリアンが目覚めた時、すでに正午をだいぶ過ぎていた。彼のヴァレットが、主人が起きたかどうかを確かめるために、忍び足で何度も様子をうかがっていた。どうして若い主人は、こんなに遅くまで眠っているのかと不思議でならなかった。とうとう呼び出しのベルが鳴った。ヴィクターは、セーブル焼きの骨董の小さな盆の上に、紅茶のカップと一束の手紙をのせてやって来た。三つの高い窓の前にかけてある、輝く青い裏地がついたオリーブ色のサテンのカーテンをひいた。

---

(10) Hayward, p. 5.

(11) Horn, p. 95.

(12) 男性使用人には1937年まで年に15シリングの特別税がかかった。Pool, p. 229.

(13) Horn, p. 95.

「今朝はよくお眠りでしたね、ムッシュー」と彼は笑顔で挨拶した。

「何時だい、ヴィクター？」と眠たげにドリアン・グレイはたずねた。

「1時15分です、ムッシュー。」<sup>(14)</sup>（75－76）

主人の日常生活を熟知するヴァレットは、ドリアンの朝寝坊を内心いぶかりながらも紅茶と手紙をもって登場し、いつもと同じ職務内容を滞りなくこなしている。主人に挨拶する際に、ヴィクターがドリアンを「ムッシュー」（“Monsieur”）と呼んでいるのは興味深い。なぜなら他の使用人が「サー」（“Sir”）や「マイ・ロード」（“My Lord”）の呼称を使用する中、ヴィクターの使う「ムッシュー」は、彼がイギリス人ではなくフランス人であることを示すからだ。ヴィクトリア朝屋敷では、料理人やフランス語の家庭教師としてフランス人を雇うことはしばしばあったが、ヴァレットにフランス人を雇用するドリアンの意図は何なのだろうか。

喜劇『真面目が肝心』の台詞で言及されるフランス人メイドは、ヴィクトリア朝社会でフランス人使用人が意味していたものをうかがい知る手がかりになると思われる。ブラックネル卿夫人は、息子の結婚相手となるセシリー嬢の洋服や髪型が気にいらず、次のように意見する。

「可愛いらしいお嬢さんじゃないの！ドレスはあまりに冴えないし、髪型は自然のままでも手を加えていないといった感じだけれど。でもすぐに改善できるわよ。熟練したフランス人メイドを雇いさえすれば、短期間でほんとうに素晴らしい結果が生み出せるわ。」<sup>(15)</sup>

男性主人に仕えるヴァレットと等しい役割の女性使用人は、女主人の私生活を身近で支えるレディーズメイドだ。つまりブラックネル卿夫人は、セシリーの身の回りの世話をするレディーズメイドとして、イギリス人ではなくフランス人を雇用すれば、女主人となるセシリーの装いは洗練されたものになると確信しているのである。自分達こそ世界の覇者と信じていたイギリス貴族にとっても、やはりファッションの流行の中心地は、ロンドンではなくフランスのパリだった。ダンディーな紳士として流行の最先端を自身が体現しなければならないドリアンにとって、「宝石のつけ方、ネクタイの結び方、杖のあしらい方」（99）に関して洗練された趣味をもつフランス人のヴィクターが貴重な存在だったのはまちがいない。ドリアンはヴァレットにフランス人を雇用することにより、ファッション・リーダーとしての自身の価値を高めようとしたのである。

---

(14) Wilde, *The Picture of Dorian Gray*. この作品からの引用はかっこ内にページ数のみを記す。

(15) Wilde, *The Importance of Being Earnest*, p. 409.

そしてファッションだけでなく、食文化でも流行を先取りしているといわんばかりに、朝の入浴を終えたドリアンのために、ヴィクターが運んでくる朝食は、ボリュームたっぷりのイギリス式ではなく軽いフランス式である。目覚めた後のドリアンの振る舞いを見てみよう。

精巧なシルクの刺繍が入った、洒落たカシミアのガウンをはおった彼は、縞縞瑠璃が敷き詰められたバスルームに入ってしまった。冷たい水は、長い眠りの後の目覚めをさわやかなものにしてくれた……彼は着がえを終えると、すぐに書斎に入り席についた。開かれた窓際の小さな円形テーブルの上に、軽いフランス式の朝食が用意されていた。素晴らしい日だった。心地よい空気は、香しい匂いで満ちているようだ。飛びこんできた蜂が、硫黄のような色合いの黄色のバラで飾られた、目の前の青龍模様の花瓶近くをぶんぶん飛び回っていた。

.....

「寒すぎますか、ムッシュー？」とテーブルの上にオムレツを置きながらヴァレットがたずねた。「窓をお閉めいたしましょうか？」(76)

ヴァレットにかしずかれながら豪華な浴室でまどろみ、いかにも唯美主義の生活様式にのっとった振る舞いを示すドリアンは、ワイルド作品において特異な人物ではない。朝の身支度を行う青年貴族が短編「アーサー・サヴィル卿の犯罪」にも登場する。ドリアン同様に朝寝坊した若い主人に、ヴァレットが仕える場面は次のようなものだ。

アーサー卿が目覚めたのは、12時だった。真昼の太陽が、寝室の象牙色のシルクのカーテンを通して輝いていた……ヴァレットがチョコレートの入ったカップを盆にのせて運んできた。それを飲み終えたアーサー卿は、うすい桃色の重厚なピロードの仕切りカーテンをひき、バスルームへと入ってしまった。頭上の透明な縞縞瑠璃の薄い板から、光が差し込んでいた。大理石のバスタブの水は、月長石のように乳白色にきらめいていた。<sup>(16)</sup>

目覚めた直後にヴァレットが運んできた飲み物を味わい、その後、入浴するなど、ドリアンとアーサーの生活様式には多くの共通点がある。さらに縞縞瑠璃があしらわれたバスルームや凝った作りのカーテンなど、両者ともにヴィクトリア朝を特徴づける室内装飾へのこだわりが見てとれる。<sup>(17)</sup> もちろんこれらの共通点は、ダンディーな唯美主義者としての彼らの美的価値に基づくものだろう。

---

(16) Wilde, "Lord Arthur Savile's Crime", pp. 168-169.



しかしドリアンやアーサーが、装飾過剰な室内で、そこまでの必然性はないと思われるような営みを日々執拗にくり返すのは、すべてが本人の趣味の問題だけではないのかもしれない。なぜなら社会の流動性が高まり、血族関係の重要性が薄れていったヴィクトリア朝では、上流階級の一員という出自は以前ほどの意味をもたなくなっていたからだ。

個人あるいは家族における歴史が、社会的アイデンティティを決定する有益な手掛かりでなくなった世界では、初対面の人間に対する解釈は、より分かりやすいサインに頼ることになる。それは、服装、話し方、振る舞い、住居の場所、生活様式である。<sup>(18)</sup>

「ヴィクトリア朝に特徴的なややこしいエチケットの多くが……流動性の激しい社会で身を処していくための策」<sup>(19)</sup>なのだとしたら、洒落た洋服に身を包んだドリアンとアーサーが示す微に入った振る舞いは、彼らの好みの問題だけではなく、社会的アイデンティティを保持するための手段であると考えられるのだ。

喜劇『つまらない女』のダンディーな紳士イリングワース卿が、「ロンドン社交界のディーナー・テーブルを支配するものは、世界を支配する。未来はダンディーのものだ。洒落者こそ、これからの支配者なのだ」<sup>(20)</sup>と主張する時、彼はたしかにダンディズムのもつ社会的価値を称揚している。しかし彼の肯定的な発言の裏には、かつては世界の覇権を握ったイギリス貴族が、上流階級の出自だけで支配者となれた時代は過ぎ去ったという否定的意味合いが隠されている。伝統ある家系の一員というだけでは、世界の支配者どころか、参加者が増え続ける一方のイギリス社交界での地位すら失いかねない。このような切羽つまった状況で生き抜くためには、彼らは出自以外の価値を見つけ出し、たとえばそれがダンディズムや唯美主義であったなら、自身の生き様でそれを体現しなければならなかった。ヴァレットにかしづかれるドリアンやアーサーのいかにも優雅な日常は、それに固執し、日々実践をくり返すことによってしか、社会的アイデンティティが保てなくなったヴィクトリア朝イギリス貴族の悲痛な嘆きと裏腹なのだ。

---

✓ (17) ヴィクトリア朝の室内装飾の流行に関しては Hughes, “Home Furnishings”, pp. 46-52 を参照。各部屋の装飾については Judith Flanders, *Inside the Victorian Home: A Portrait of Domestic Life in Victorian England* (New York: Norton, 2004) に詳しい。

(18) James Eli Adams, p. 51.

(19) James Eli Adams, p. 51.

(20) Wilde, *A Woman of No Importance*, p. 493.

### III

美的生活を実践し、洗練されたダンディズムを体現することにより、社会的アイデンティティを保持しようとするドリアンにとって、自身の生活様式に直接影響を及ぼすヴァレットの存在が重要だったのはまちがいない。優れたヴァレットを雇用できるかどうかは、社交界での生き残りをかけた重大な問題である。事実、ドリアンに仕えるヴィクターは、すでに確認したように、主人の美的生活の実現のため適切な務めを果たしていた。

ところがその後ドリアンは、明確な理由は明かさないままヴィクターを解雇してしまう。主人の日常生活を熟知しなければ務まらないヴァレットは、交代してもさほど問題のない下級使用人とは異なり、そう簡単に解雇できる使用人ではなかったはずだ。それにもかかわらず、なぜドリアンはヴィクターを解雇してしまうのだろうか。

ヴィクターが屋敷からいなくなったことに気がついた友人のバジルが、「あのフランス人の使用人はどうしているのか？」とたずねると、ドリアンは「彼はラドリー夫人のメイドと結婚した後、彼女をイギリス人の仕立屋と宣伝し、パリで商売をしているようだ」（111）と答える。解雇は使用人側の事情のためと言うドリアンではあるが、主人側の一方的説明がすべての真実を告げているとは限らない。自身それに気がついているように、バジルにむかって、解雇されたヴィクターについて意見するドリアンは、言葉をにごして歯切れが悪い。

「でもね——君も分かっているだろう？——彼は断じて悪い使用人ではなかった。決して好きではなかったけれど、だからといって特に不満もなかった。人は時にかなり馬鹿げたことを思いつくものさ。彼はほんとうに僕によく尽くしてくれたし、立ち去る時は悲しそうだった。」（111）

ドリアンの発言で見逃すべきでない点は、「人は時にかなり馬鹿げたことを思いつくものさ」（“One often imagines things that are quite absurd.”）という文の主語が、具体的にヴィクターを指し示すheではなく、一般的なoneへと替えられていることだ。代名詞のすり替えにより、一見ヴィクターとは無関係に思われるこの一文にこそ、解雇のほんとうの理由が隠されているとは考えられないだろうか。「好きではなかったが、だからといって特に不満もなかった」とあいまいに言葉をにごすドリアンの真意を探るため、手始めに肯定的とも否定的とも判断しかねる、ドリアンのヴィクターに対する使用人としての評価を分析してみよう。

家事使用人の優劣を判断する有益な参考例として、理想的な執事として名高い『理想の夫』のフィップスがいる。彼は以下のように描写される。

執事のフィップスは、書きもの机の上の新聞紙を整えている。フィップスの特徴は、その無表情だ。彼は熱狂的ファンから「理想の執事」と呼ばれている。スフィ



ンクスでも、彼ほど感情を読みとるのが難しくはない。彼は形式という名の仮面なのだ。彼の知的および感情的生活について、歴史は何も語らない。彼は形式の優位を代表している。<sup>(21)</sup>

引き続き、ヴィクターの描写を見てみる。

その男は無表情のまま、主人の命令を待っていた。ドリアンはタバコに火をつけ、鏡のところまで歩いていき、ちらりと中をのぞき見た。鏡にはヴィクターの顔が完全に映っていた。それは感情をもたない奴隷のような仮面だった。(91)

仮面そのものと評されるフィップスが、熱狂的ファンをもつほどの理想的な執事なら、同じく仮面のように無表情なヴィクターも理想的なヴァレットだ。家事使用人に求められる振る舞いとは、自身の考えや感情を一切もたない振りをすることであり、彼らは仮面という形式に固執することにより、それを実現しているのである。

しかしドリアンは、優秀なヴァレットであるはずのヴィクターの資質に次第に疑問を抱き始める。そしてそれは、すべて主人の秘密に関連して生じるのだ。たとえばドリアンと場末の二流女優シビルが恋人だったことや、ましてや彼女がドリアンとの破局ゆえに毒を飲み自殺したことは公には知られていない。ところがドリアンは、シビル検死の記事が載ったセント・ジェイムズ紙を運んできたヴィクターが、シビルの死に主人が関わっていることに気がつくのではないかと恐れている。

ドリアンは顔をしかめた。新聞をふたつに破って部屋を横切り、ばらばらにして投げ捨てた……ヴィクターが見たかもしれない。あの男だって、新聞を読めるぐらいの英語は十分に知っている。ひょっとしたらもう読んでしまって、すでに何かを疑い始めているかもしれない。(96)

シビルの自殺は毒の誤飲による事故死と判断され、記事にはドリアンの名前すら登場しない。死に至るほんとうの原因がドリアンの身勝手な婚約破棄にあったことは、調査を行った検察官すら暴き出せない秘密である。それにもかかわらずドリアンは、屋敷の家事使用人がその秘密をかぎつける危険を感じているのだ。

永遠の美を保つドリアンの生身の肉体に代わって、彼が犯した罪のしるしを負う超自然的肖像画は、ドリアンがシビルを見捨てた後、その罪を反映して醜く変化する。シビルの死の

---

(21) Wilde, *An Ideal Husband*, p. 553.

原因が自分にあるという秘密以上に、己の真の姿が描かれた醜悪な肖像画こそ、ドリアンが世間から終生隠し通さなければならない最大の秘密だ。そしてこの肖像画の秘密をめぐり、やはりドリアンはヴィクターを怪しみ出す。

ドリアンには、ヴィクターが部屋から出ていくたびに、肖像画が置かれている衝立の方を見るように思われた。いや、これは単に彼自身の空想なのか？ (91)

画布の変化を悟られないために、肖像画を衝立で隠しているにもかかわらず、ドリアンは、役目を果たすため部屋に出入りするヴィクターが、そのたびに肖像画に視線を向けるような気がしてならない。

過度に視線を恐れるようになったドリアンは、ついに肖像画を屋敷の一階から人目につかない最上階へと移動することを決意する。肖像画は屋根裏に嚴重にかくまわれ、その部屋の鍵はドリアンが肌身離さずもっているため、彼以外の人間が肖像画を目にする危険はなくなった。しかし、それでもなおドリアンは、屋根裏に隠された肖像画の秘密をヴィクターが嗅ぎ出すのではないかと不安に駆られる。

ひょっとしたら、ある晩、階段をそっと忍び上がり、部屋のドアを押し開けようとするヴィクターを目撃するかもしれない。屋敷にスパイがいるなんて、恐ろしいことだ。(95)

ヴィクターがスパイであることを裏づける具体的証拠は何もない。しかし屋敷に住みこみで働く家事使用人が、主人の私的な秘密を探り出すことは、そう困難ではなかっただろう。事実ヴィクトリア朝には、「ハウスメイドの正直さと忠誠心を確かめるために、わざとコインを床の上に置いたり、絨毯の下に隠したりした女主人もいたほどだ。コインを見つけたメイドが、すぐに主人に渡すかどうかを試したのである。」<sup>(22)</sup>

そしてドリアン自身、家事使用人に裏切られた主人の話を知っていた。

ドリアンは、家事使用人に恐喝された金持ちの男たちの話を聞いたことがあった。使用人たちは、手紙を読んだり、会話を盗み聞きしたり、あて名の書かれたカードを拾ったり、あるいは枕の下のしおれた花やしわくちんのレースの切れ端を発見したりして、主人の生活を脅かしたのだ。(95)

---

(22) Horn, p. 72.

主人と使用人との距離は職種によって様々だが、少なくとも、それ以外の人間なら知り得ない主人の私生活を家事使用人はのぞき見ることができた。そして発見したコインを隠しもつ程度ならまだしも、中には主人にとって致命的となる秘密を発見し、その暴露をもくろむような使用人もいたのである。家事使用人とは、屋敷の日常から見つけ出した秘密をきっかけに、主人の社会的地位を根底から揺らがすような危険を秘めていた。

思えば、ドリアンの朝の身支度を手伝うヴィクターは、主人の起床時間が遅いことをいぶかっていた。おそらくアーサーのヴァレットも、昼過ぎまで眠り続ける主人を怪しく思ったにちがいない。実際、主人の朝寝坊への使用人の疑念は的中しており、二人が前日の夜にとった行動はまったく適切ではなかった。ドリアンは劇場で女優シビルの下手な演技に絶望した後、そしてアーサーはパーティーで出会った占い師の「殺人」という予言にショックを受けた後、両者ともひどい精神的ダメージから逃れようと夜通しロンドンを歩き回っていた。いかがわしい下層階級地域にも足を踏み入れた二人の徘徊が、上流貴族にとって好ましくない行動であるのは明らかであり、それは公にはできない秘密である。しかし本人以外には知らないはずの秘密を察知できる人間がいるとすれば、それは主人の日常を身近で支える家事使用人、中でも主人との距離がもっとも近いヴァレットなのだ。

#### IV

社会的地位で優位なはずの屋敷の主人が、格下の家事使用人の存在におびえるという逆転した状況を見ると、両者の関係は、一見そう思われるほど確固としたものではないのかもしれない。それを裏づけるように、主人と使用人の危うい関係はドリアンとヴィクターだけでなく、喜劇『真面目が肝心』の貴族アルジャノンと彼に仕える執事レーンについても見てとれる。二人がウィットに富んだ会話をかわす場面<sup>(23)</sup>について述べられた意見を見てみたい。

アルジャノンの軽薄さに対するレーンの落ち着きは、両者あいまって、財政的に不安がない人間の自己充足と自力で生き抜かなければならない人間の冷淡さを大いに論評している。表面上ではアルジャノンとレーンは、主人と使用人が行うウィットを競うゲームの勝利は、常に主人側であることを理解している。しかし、洗練され皮肉に富んだレーンの受け答えは、自分が属する世界像を表現しようとするアルジャノンの能力を遥かに上回っている。執事の巧妙なマナーは、青年貴族が試みる機知をゆがめ、その力を弱めてしまう。<sup>(24)</sup>

---

(23) 劇の冒頭で下手なピアノ演奏を終えたアルジャノンが登場し、お茶の用意をするレーンと自身の演奏や結婚観について会話する場面である。Wilde, *The Importance of Being Earnest*, pp. 357-358.

(24) Gillespie, p. xi.

主人と使用人によるゲームの勝敗の行方は、仮面を被った使用人の本音を隠した巧妙さによって、いつなるとき逆転するか予断を許さない。主人に与えられるはずの勝利とは、使用人の機知に富んだ策略の一つで、あっというまに敗北へと帰してしまうのだ。

醜く変化する超自然的肖像画という最大の秘密をかけて、家事使用人とのゲームに望まずとも参戦することになったドリアンは、彼らが見つけ出すささいな証拠が、主人に致命的なダメージを与える危険に気がついていただろう。使用人への恐怖に取りつかれたドリアンが、ヴィクター解雇の際に述べた「人は時にかなり馬鹿げたことを思いつく」とは、主人の秘密を察知した使用人が、それをきっかけにスパイへと変化し、隠された秘密を暴き出し主人を窮地に陥れようと画策することを意味していたのだ。

この男はすぐに追い出さなくてはならない、とドリアンは感じた。肖像画がどこに移動されたのかを知られるわけにはいかない。ヴィクターには、どこかずる賢いところがある。油断のならない、裏切り者の目をもっている。(93)

理想の使用人として評価していたはずの「感情をもたない奴隷のような仮面」を、「油断のならない、裏切り者」の証拠と信じこんだドリアンは、有能なヴァレットだったはずのヴィクターを、危険なスパイとして屋敷から追放したのである。すなわちヴィクター解雇のほんとうの理由は、使用人側の事情ではなく、ヴィクターの存在そのものを危険視したドリアンの家事使用人に対する恐怖ゆえだった。

屋敷から一方的にヴィクターを追い出すドリアンの行為は、一見、ドリアンの絶対的に有利な立場を証明しているように思われる。しかし行為の裏に隠された、主人が抱く家事使用人への恐怖の存在は、権威を有するはずの主人が、その転覆を画策する使用人の巧妙な仮面に対抗すべき決定打を持ち合わせていないことを暴露してしまう。階層間の流動性が高まったヴィクトリア朝社会で、屋敷で働く家事使用人、中でもヴァレットが、上流貴族にとって特権的立場を主張する有効なステイタス・シンボルだったのはまちがいない。ところが皮肉にも、勝敗に予断を許さない危機的な状況で、もっとも身近な味方ヴァレットが、もっとも危険な対戦相手へと変貌してしまったのだ。19世紀イギリス屋敷の主人と使用人のゲームの顛末は、崩壊していく自身の社会的アイデンティティなど意に介さない優雅な洒落者を装い続けた、上流貴族の有終の美に彩られた敗北への道筋だったのである。

#### 参考文献

Adams, James Eli. “‘The boundaries of social intercourse’: Class in the Victorian Novel.” *A Concise Companion to the Victorian Novel*. Ed. Francis O’Gorman. Malden: Blackwell, 1998. 47-70.

- Adams, Samuel, and Sarah Adams. *The Complete Servant*. Ed. Ann Haly. East Sussex: Southover, 2004.
- Damon, Duane C. *Life in Victorian England*. Detroit: Gale, 2006.
- Eckardt, Wolf Von, Sander L. Gilman, and J. Edward Chamberlin. *Oscar Wilde's London*. London: Michael, 1987.
- Flanders, Judith. *Inside the Victorian Home: A Portrait of Domestic Life in Victorian England*. New York: Norton, 2004.
- Gillespie, Michael Patrick. Preface. *The Importance of Being Earnest*. By Oscar Wilde. New York: Norton, 2006. ix-xii.
- Guy, Josephine, and Ian Small. *Studying Oscar Wilde: History, Criticism, and Myth*. Greensboro: ELT, 2006.
- Hayward, Edward. *Upstairs and Downstairs: Life in an English Country House*. Hampshire: Pitkin, 2009.
- Horn, Pamela. *The Rise and Fall of the Victorian Servant*. Gloucestershire: Sutton, 2004.
- Hughes, Kristine. *The Writer's Guide to Everyday Life in Regency and Victorian England*. Cincinnati: Writer's Digest, 1998.
- May, Trevor. *The Victorian Domestic Servant*. Oxford: Shire, 2009.
- Mitchell, Sally. *Daily Life in Victorian England*. Westport: Greenwood, 2009.
- Nunokawa, Jeff. *Tame Passions of Wilde: The Styles of Manageable Desire*. Princeton: Princeton UP, 2003.
- Pool, Daniel. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew: From Fox Hunting to Whist — The Facts of Daily Life in Nineteenth-Century England*. New York: Touchstone, 1993.
- Thompson, F.M.L. *The Rise of Respectable Society: A Social History of Victorian Britain 1830-1900*. Cambridge: Harvard UP, 1988.
- Wilde, Oscar. *An Ideal Husband*. *Complete Works of Oscar Wilde*. Glasgow: Collins, 2003. 515-582.
- . *The Importance of Being Earnest*. *Works*. 357-419.
- . "Lord Arthur Savile's Crime." *Works*. 60-183.
- . *The Picture of Dorian Gray*. *Works*. 17-159.
- . *A Woman of No Importance*. *Works*. 465-514.